

② 平田佐矩俳句「冬の雨」抄（『志のぶ草』私家版、昭和十五年）

遺骨上海を発つときく
冬の雨ころろは帰る海の上

遺骨原隊着
物云はぬ人ばかりなる冬日哉

遺骨御下渡しになる
野の枯れに寒さ抱ける人ばかり

出征前湯の山にて句を合せなどせるを想ひて
今はたゞいとほしさのみ百合の花

遺骨帰宅す
木枯の中を一人で二人来ぬ

老父不自由の身に紋服を着て出迎ふ
来たかやと誰にもものいふ寒さ哉

通 夜
父ひとりもの云はぬ夜の寒さ哉
骨に夢あらむ木枯吹きめぐる

遺骨を白紙の上に広げて一族集まりて骨拾ひをなす
父が子の骨拾ひする寒さ哉
もらひ来し骨にももの云ふ冬夜哉

作者プロフィール 平田佐矩（明治二十八年〈一八九五〉～昭和四十年〈一九六五〉）政治家、実業家、歌人・俳人。富田一色平田家の四代目当主。平田紡績の四代目社長。第十一代四日市市長（昭和三十四年～昭和四十年）。市長在任中にはコンビナートの誘致、日本横断運河構想、ロングビーチ市との姉妹都市提携などの業績を重ねる一方、「四日市公害」の責任者でもあった。実業家時代には短歌（号湖舟）・俳句（号鶴声）を趣味とし、特に俳句では俳誌『かいつむり』で活躍し、平田家茶室で句会を開いたりした。実弟佐貞が中国大陸で戦死し、その追悼集『志のぶ草』が吉川夏晶編で昭和十五年に出版された際、佐矩自身も短歌・俳句などの作品を発表。